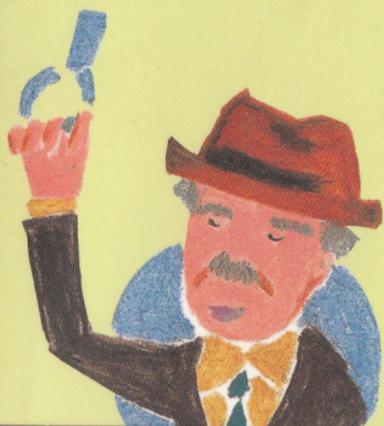
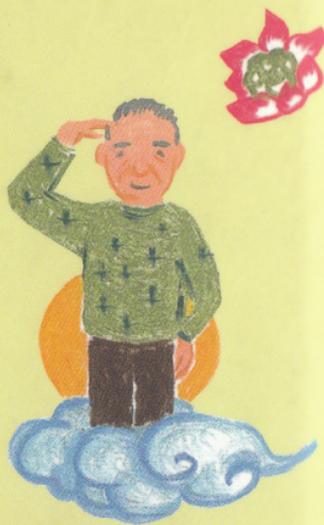


石堂秀夫 選

Ishido Hideo

一億人のための 父よ!



自信喪失の前に、
父のことは父に習う
1600字のメッセージ。

すべて、お父さんへの応援歌です。

桜の一枝

私の最も幼いころの記憶は父との桜の思い出にさかのぼる。浦和の官舎の庭にその桜はあった。引越す前なので、私は二歳だった。春になって淡いピンクに変わった木を見る娘に、父はほんの気まぐれだったのだろうか、踏み台を持ってきて一枝を手折ってくれた。優しいふりなどしない父だったが、この時のことは記憶に残っている。

私は戦争を知らない世代だが、父は二度徴兵された。父が終戦を迎えたのはニューギニアだ。その島だけで約二十万人の若者が兵士として動員され、しかも一割程度しか生きて戻らなかった。だがその実体は、戦死とは少し意味合いが異なる。爆撃で食料路をたたれ、南洋のジャングルを逃げまどい栄

養失調とマラリアで命を落としたのだ。現地でのその凄惨な状況は、父の法事に来てくれた戦友会の方から知った。

「餓死だった。あれは犬死だ」その御老人はポツリと言われた。細川首相が「日本軍の行なった侵略戦争を謝罪する」と言った夏だった。

ニューギニアからかううじて帰ったものの、「敗残兵」と嘲られ、敗戦の日本で父達は心身を癒す間も与えられなかった。栄養失調で体調をくずし晩婚であったため、私が生まれた時は四十に手が届く年齢だった。もはや子供も授けられないと父は思っていたらしい。母が流産した後に、私は最初の子として生まれた。

父が戦地の夢にうなされ飛び起きた、と言っていたのを聞いたのは、一度や二度ではない。家族のちよつとした言葉の端で機嫌が悪くなる気むずかしいところがあった。豊かさに慣れきった現代の世相をみるにつけ、戦地に赴いた者の苦勞は一体なんだったのだろうかという気分にもなったのだろうか。晩年には孫すらも寄せ付けぬほど人嫌いになり、アルコール依存が酷くなっ

た。

定年後しばらくは、元気で庭いじりや書道を楽しんでいた時期もあった。ある日、父の所にいくと「諦念」と書いた二文字を示した。多くの人々が時とともに戦争の傷を忘れようとしたのに、戦友の屍を置いて帰ってきた者は、悪夢から解放されることはなかったのかもしれない。郵政事業への功労で叙勲され、「お母さんを皇居へ伴って行けるのが嬉しい」と言っていたのにもかかわらず、年を経るごとに人間不信が昂じ、母への暴力が悪化する一途となった。ついには刃物すら向けるようになって、父は、どうしようもなく疎ましい存在になっていった。母がいないと、困って探し回るくせに、何かにつけ意地の悪いことをする。

年毎に父の憂鬱は深まり、私にかかってくる母からの電話は深刻さを増していった。

母から父が救急車で入院した知らせを受けたのは、秋だった。父は植木の手入れをしていて木から転落、頭を打った。父の意識ははっきりしないまま

だったが、機嫌は良かった。鼻歌まじりに母の好きな「浜千鳥」の歌を何度も歌った。かつて、私たちが訪ねて行くとかたくなに側に寄ることを拒んでいたのに、病室では「○○はいないのか」と家族の名前を呼び、駆けつけてきた顔を見ては安心した。

入院して二週間後、父は亡くなった。

あれから七年、十八歳になった子は気が付けば私より頭半分も背が高くなっている。どうしたわけか、このごろ懐かしさを持って父を思い出す。もしも、父がニューギニアで地獄絵を見るところという非情な体験をしなければ、心安らいた晩年を迎えられたかもしれないと思ったりする。和やかな家族の団欒をも拒絶することはなかったろうにと考える。

私が平和の大切さを願って国際理解のNGO活動に力を入れるのも、やはり父の事と関係がないわけではない。

来年は父の千支の兎だ。

私は、桜の一枝をとってくれた日の父を忘れない。